

学生の授業満足度に関連する要因 医学部医学科授業評価調査およびKJ法を用いた検討

三笠 洋明¹, 赤池 雅史^{1,2}, 岩田 貴², Kalubi Bukasa¹, 福井 義浩¹

1: 徳島大学医学部教育支援センター

2: 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部医療教育開発センター

目的 学生の授業満足度は、学生のモチベーションにも影響し、自発的な学習を促進する事にもつながる重要な課題である。しかしながら、どのような要因が学生の満足度を向上させ、自発的な学習を促進するかについては十分な分析はなされていない。そこで、学生の積極的な学習(予習復習)ならびに授業満足度に関連する授業内容項目を検討した。

対象と方法 蔵本地区で実施されている授業評価アンケート調査のうち 2010 年度医学部医学科 2~3 学年, 7 授業, 634 件を用いた。質問項目としては、受講態度, 復習予習, 目標の提示, 重要事項の強調, 内容容易, 授業工夫, 目標達成, 将来役立, 授業満足度の 9 項目を用いた。回収率は 84.5%であった。また、3 年生の 12 名を対象とし KJ 法を用い、予習復習を促進すると考えられる要因の抽出を行った。統計解析は、SPSS Ver15.0 を用いた。

結果

学生の満足度に関連する教員の項目を最適尺度法を用いた回帰分析を行った(表 1)。寄与率は 0.635 であった。全ての係数が正であり、統計学的に有意であった。授業の工夫が最も大きく次いで内容容易、目標の提示、重要事項の強調がこれに次いだ。

学生の予習復習に関連する項目を表 2 に示した。寄与率は 0.258 であった。最も強い正の関連項目は、目標の提示であり、授業工夫がこれに次いだ。内容容易は、弱い負の関連を示した。

9 つの質問項目から、高次の概念を抽出することを目的として主成分分析を行った(図 1)。2 つの主成分が抽出され、第一主成分の固有値は 3.827 であり、全体の分散の 42.5%を説明していた。第二主成分は固有値は 2.6 であり、全体の分散の 29.1%、2 つの主成分で全体の分散の 71.6%を説明していた。第一

主成分では、受動的な授業満足度の成分と解釈された。第二主成分では、積極的な学習の成分であると解釈された。ただ、予習復習に関連する項目が少なく情報量が乏しいと考えられた。

学生グループによる KJ 法により、予習復習に関連する項目について意見の抽出と分類を行った。その結果 103 件のカードが得られた。

抽出されたカテゴリーとしては、講義内容、試験、配布資料に続き予習復習課題、コミュニケーション、カリキュラム、教科書/参考書、出席記録、講義時間、等 13 のカテゴリーに分類された(表 3)。

講義内容に関するサブカテゴリーを表 4 に示した。他教科との関連を示す、学生に質問するなどの双方向性、論理的思考に繋がるものが上位を占めた。次いで重要事項の強調、目標の提示、内容の連続性など構成に配慮する、予習をすることを前提とした講義を行う等が認められた。

試験に関しては、小テストの実施を望むもの、適切な難易度の試験を望むものが認められた。配布資料に関しては、教科書的に学習すべき全ての情報が重要度と共に記載され A4 に統一された資料を、講義前に(予習が出来るように)配付して欲しいとする一方で、講義中にメモをしたり、作業が必要とするものもあった。だが、講義中にメモの作業に忙殺されるよりも、むしろ理解に費やしたいとするものもいた。

予習復習課題に関しては、次回の講義に向けての予習課題を示して欲しいと言う意見が多く認められた。コミュニケーションに関しては、学生は教員に 1 人の大人と認めて欲しい、講義中のアイコンタクト等を求めており、研究が楽しいと感じている教官を通じて学問への興味をかきたてられると考えられた。カリキュラムに関しては、

忙しい時とそうでない時期の差が激しい等の不満が認められた。教科書が高価で買えない、薄い教科書が欲しい、参考書を指定して等が認められた。教科書を持っていない学生も少なくない事も明らかになった。出席記録、講義時間の延長、講義環境、進行速度、発声、学習指針に関する意見も認められた。

考察

授業満足度と予習復習に関連する項目の分析と主成分分析の結果から、授業評価の 9 項目では受動的な満足度に比較し、積極的な学習に関する情報量が乏しいことを意味していると考えられた。そこで予習復習を促進する要因を学生自身に抽出させた。

個々の教員が変更可能で、予習復習を促進する可能性のある項目としては、(これまでの調査項目にないもの)、講義内容に関しては、他教科との関連、双方向性、論理的思考、内容構成に配慮、予習復習を前提が。それ以外の項目としては、試験の適切な利用、配布資料の質、コミュニケーション、教科書、講義時間、進行速度、発声、勉強の指針が考えられる。カリキュラム、出席記録、環境は学科で対応する必要がありとされる。ただ、今回の結果は小グループの学生による定性的な調査である。従って、この結果に個々に対応すると言うよりも、ここで示された項目を、今後アンケート調査に組み込み、統計的な挙動を検討する事が必要であり、予習復習を促し、満足度を上昇させる事に繋がると考えられる。

結論 授業評価調査データの解析結果から、学生の予習復習を促進させるには、教員が目標を提示し、授業を工夫していると学生に感じさせることの重要性が示唆された。学生の KJ 法によると、講義内容、試験、配布資料、予習復習課題、コミュニケーション等多岐に渡り、今後の調査と解析による検討が必要であると認められた。

表1 学生の授業満足度に関連する項目

	標準化係数	有意確率
目標の提示	0.164	0.000
重要事項の強調	0.143	0.000
内容容易	0.328	0.000
授業の工夫	0.353	0.000

R=0.797 P=0.000

表2 学生の予習復習に関連する項目

	標準化係数	有意確率
目標の提示	0.371	0.000
重要事項の強調	-0.096	0.003
内容容易	-0.054	0.256
授業の工夫	0.261	0.000

R=0.509 P=0.000

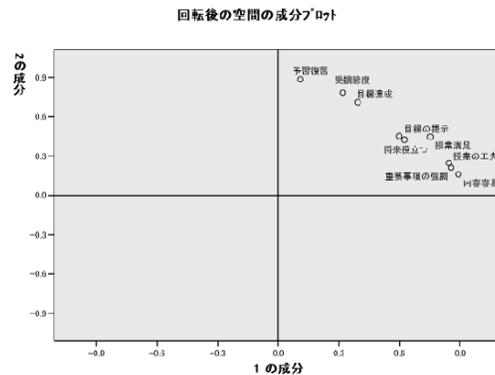


図1 回転後の因子負荷プロット

表3 KJ法で抽出された講義満足度と予習復習に関連する項目

カテゴリー	件数	%
講義内容	26	25.2
試験	11	10.7
配布資料	11	10.7
予習・復習課題	10	9.7
コミュニケーション	8	7.8
カリキュラム	7	6.8
教科書/参考書	5	4.9
出席記録	5	4.9
講義時間	4	3.9
環境	2	1.9
進行	2	1.9
発声	2	1.9
勉強の指針	2	1.9
その他	8	7.8
計	103	100.0

表4 講義内容に関する予習復習と満足度とに関連する項目

サブカテゴリー	件数	%
他教科との関連を示す	5	4.9
双方向性	4	3.9
論理的思考	4	3.9
重要事項の強調	3	2.9
目標の提示	3	2.9
構成に配慮	2	1.9
予習復習を前提とする	2	1.9
その他	3	2.9
計	26	25.2